

本部だより

◇平成15年度 日本生物工学会年次大会後記◇

大会実行委員長・広報担当理事 木田建次

日本生物工学会の平成15年度大会が去る平成15年9月16日から18日にかけて熊本大学で開催され、盛会のうちに無事終了した。

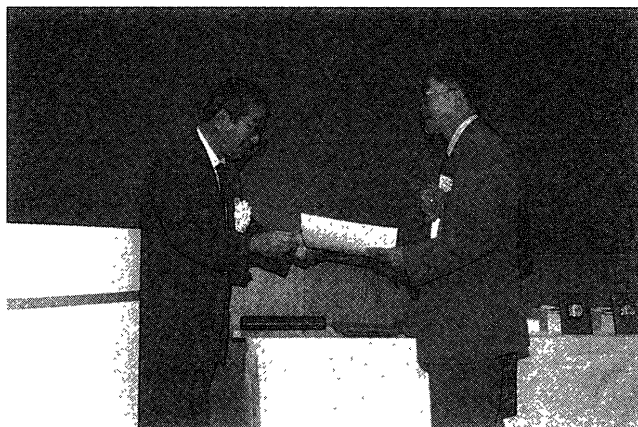
80周年記念大会の翌年、また熊本という地方都市で行うことから、参加者数や機器展示企業数がどの程度になるか懸念された。幸い熊本は天草や阿蘇といった観光地を有していることから微かな期待を持ち、2年前から熊本県の大学、高専の先生方で実行委員会を作り、準備を進めた。80周年記念大会をベースにするのは実行委員会としても重荷であるので、平成13年度年次大会を開催した山梨大学の先生方のご支援を得て準備に取りかかった。しかし、当初予想していた以上に仕事が多く、その上、熊本大学の学期制の変更に伴う開催場所や開催時期の変更により、何度も大学事務や学会本部と交渉することになった。また、締切日ぎりぎりまで心配していた講演申込数が皆様のご支援により終盤一気に増加して安心したのも束の間、自分たちも含め大会を設営される企業およびプログラムや講演要旨集を作成する印刷企業の力不足から、相互の信頼がなくなり、急遽印刷企業を変更することになった。それでもなんとか8月20日に初めての試みとして60研究室の紹介を掲載し、さらに熊本城が表紙を飾る斬新な講演要旨集を仕上げることができ、開催当日を待つだけとなった。

大会前日には、新名会長の発案で神戸大学福田教授をオーガナイザーとして「生物工学バイオベンチャーサロナー火の国で起こすバイオベンチャー」が開催された。また、幸いにも大会期間中は好天にも恵まれ、大会プログラムを順調に実行することができた。

本大会の主会場は、熊本大学黒髪キャンパスにある工学部講義棟（南キャンパス）と大学教育センター（北キャンパス）であり、前者では授賞式および受賞講演を、後者（旧教養学部）では一つの建物の中で一般講演およびシンポジウムを行うことができた。内訳は一般講演623件、シンポジウム10テーマ59件、招待講演3件、受賞講演3件、計688件と80周年記念大会と遜色ない多くの、しかもオリジナリティーの高い報告がなされた。また大会参加人数は、正会員709名、学生会員435名、非会員149名で、招待者を含めた総参加者数は1500名にも達した。

展示会場は、展示企業が大幅に減少するのを防ぐために受付後、展示会場を巡って一般講演会場やシンポジウム会場に行くように配置した。また今年の7月にはエー・イー企画社長西尾敏男氏、高崎科学器機㈱社長高崎 實氏、㈱コクサン専務取締役本田龍蔵氏のご協力を得て、熊本の機器代理店や特産品店を訪問し、代理店からも機器メーカーに働きかけていただくように要請した。その甲斐があり出展協力企業数は42社（小間数54）に達し、熊本の機器代理店もブースを設置し機器の展示を行っていただくことができた。また、特産品コーナーを設けることができた。さらに熊本ということで焼酎を500本用意して抽選会を企画し、参加した皆様方に好評を得た。

大会初日午前中に授賞式と受賞講演があり、新名会長の挨拶、受賞選考経過報告に続き、生物工学賞（室岡義勝氏）、江田賞（福田 潔氏）、照井賞（紀ノ岡正博氏）、論文賞（Chen Yang氏ら、曾根岳史氏ら、阿賀 創氏ら、藤井隆夫氏ら、野澤通代氏ら）が授与された。その後、室岡先生から「遺伝子工学の基盤技術開発」と題する生物工学賞受賞講演が行われた。午後からは黒髪北キャンパスだけとなり、大会参加者の方々も会場を歩き回ることなく、大学教育センターの建物の中で落ち着いて一般講演およびシンポジウムを聴いていただくことができ



生物工学賞の授与



懇親会

た。また熊本大学学長のご配慮もあり、大会初日と2日目には五校記念館がオープンされ、多くの参加者の皆様が見学されたとのことである。

懇親会は、大会初日の夜、熊本キャッスルホテルで373名の参加者数を得て盛大に行うことができた。熊本特産の海の幸や山の幸に加えて馬刺しなど多くの料理を取り揃え、また九州の各県の酒造組合（主として焼酎）や清酒、ビール、ワイン製造メーカーのご寄付により、焼酎コーナーや清酒コーナーを設けるとともに、アトラクションとして山鹿灯籠踊りを満喫していただくことができた。

生物工学若手研究者の集い（通称若手会）は、大会2日目の講演が終了した後、北キャンパスにあるくすの木会館で開かれた。一般36名、学生36名、計72名の参加者が集い、研究話等に花を咲かせた。当日申込の参加者が多く、料理の方は若い胃袋に早々に収まってしまったが、後述する歓迎交流パーティーに参加された韓国の先生方も若手会に途中から参加され、交流会が盛り上がった。特に、若手会実行委員の先生のアイデアで熊本県の自慢できる所が紹介され、参加者皆様に喜んでいただくことができた。

韓国からは招待講演3件と一般講演10件が行われ、韓国生物工学会などからの参加者25名との歓迎交流パーティーも催され、日韓の友好が深められるとともに、若手会にも合流され、楽しい一時を過ごしていただいた。

大会期間中は、旅行代理店のご協力により市内から大学までの臨時バスを確保することができ、皆様方の大学までのアクセスが容易になったものと思っている。また、コンベンションセンターの学会開催に対する過大なるご支援と皆様方の宿泊証明書のご協力により学会運営も赤字を出すことなく終えることができた。

前述したように機器展示企業を増やすために4人で熊本の代理店等を回ったが、その時、焼酎談義に花が咲いた。これがきっかけとなりこの11月12日東京会館ロイヤルルームで、日本の食文化と環境を考える会（山縣民敏会長）の主催、日本生物工学会/東京科学機器協会/本格焼酎技術研究会の後援で「バイオテクノロジーと食文化を考える」講演の夕べを開催することができた。250名の参加者を得て、九州の本格焼酎をアピールすることができた。

九州の日本生物工学会正会員数は201名であるが、前支部長のご意見で熊本県の会員の先生方で実行委員会を設立し、前々年度および前年度の実行委員の先生方から貴重なご助言と資料をいただき、皆様のご協力を得て学会を成功裏に終えることができた。この成果は熊本日々新聞やコンベンションセンターのインターネットでも紹介され、21世紀のバイオテクノロジー分野での日本生物工学会の活動などをアピールすることができた。

このように本年度の年次大会を熊本で開催したが、平成15年度の九州支部大会（12月13日開催、南九州大学・宮崎）においても一般講演72件、学生賞対象講演9件とこの10年間で最も多い発表となり、九州のバイオテクノロジーへの情熱や期待が強く感じられ、支部長としての重責を感じております。